
Traumel

アヤノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T r a u m e i

【Nコード】

N 0 9 5 5 L

【作者名】

アヤノ

【あらすじ】

あなたは大親友の結婚する相手がこの世界の人でないと言われたらどうしますか？そんな告白をされた桜町香耶さくらまちかほが親友鈴原美佐子すずはらみさこの結婚式にでて欲しいといわれ…

そんなことから始まる異世界トリップファンタジーそして異世界恋愛ストーリー（になる予定）

第0章 全ての始まり

「え……今……なんて言った？」

桜町香耶は、手に持っていたカシスオレンジのグラスを無意識の内にかたりとテーブルの上に置き、自分の目の前に座り、幸せそうにここにこ笑う鈴原美佐子に尋ねた。

〓 〓

「あのね、私結婚することになったの」

話があるから飲みに行こうと誘われ、勤務時間が終わっても中々仕事が片付かず、今度飲み連れて行くからと約束をさせられつつ、ブーブー文句を言う後輩に任せ、大慌てで行きつけの居酒屋にやってきた。当たり前のようにそこに美佐子は居て、香耶が席に座り謝ろうとする前に、彼女は開口一番にそう言った。

香耶と美佐子は、高校時代からの親友で、遊びに行くときも旅行に

行くときもいつも一緒。プライベートはお互い知り尽くしている仲だ。そんな彼女からのいきなりの報告に、香耶はびっくりして一瞬頭を真つ白にした。我に返れたのは、店員さんが香耶におしほりを渡し、ドリンクの注文を取りにきたからだ。

美佐子はそんな香耶を、さも面白いものを見るような目で見つめていた。

「えっと、え、きよ今日エイプリルフルじゃないよね？」

「うん」

「……ほ、本気？」

「本気も本気。もう結婚式の日も決まってるのよ」

「え…えええ！？」

いきなりのことに頭が追いつかず、香耶はパニックになって先程もらったおしほりをたたんだり開いたりを繰り返した。美佐子はそんな様子を見てクスクス笑っている。その笑顔が余りにも幸せそうで、香耶は彼女が嘘をついていないことをなんとなく頭では理解した。しかし心がついていかない。

「で、でも……付き合ってる人がいること自体、知らなかった、よ」

そう、その事実が香耶にとってショックが大きかったのだ。

今までずっと一緒にいて、お互い知り尽くしていると思っていた。

先日会った時も彼女は恋人のこの字も話題にせず、仕事の愚痴がメインテーマだった為、まさかそんな話が降って出るとは思わなかったのだ。仕事をやめようかなと思っただけは、まる

で恋人同士のように毎日交わすメールで知っていたので、その話だろうと思っていたのに。
それなのに、まさか、結婚だなんて。

「うん、ごめんね。隠してたことは本当に悪いと思ってる」

「……」

「香耶に言いたくないわけじゃなかったの。むしろ言いたくても言えなかったって感じで……」

「本当に？」

「本当。大体、この結婚の話も、最初に話したの香耶だからね？言えなかっただけなの」

信じて、と言われると信じるしかなかった。コクリと頷けば、美佐子も安心したようにほっと一息ついた。まだちょっと納得できない部分はあるけれど、でも大親友が結婚という人生の一大イベントを迎えるというのに、拗ねてばかりいるのは何となく子どもっぽいと思ったのだ。まだ少し心配そうに自分の方を見つめる美佐子を見る。

「おめでとう！心から祝福するよ！！」

にっこり笑ってそう言うと、美佐子は一瞬目を見開いた後、大きな瞳をウルウルさせた。

「お待たせしました」と店員さんが先程呆然としたまま香耶が頼んだカシスオレンジと美佐子のビールを運んできた。泣きそうな顔をしている美佐子に一瞬ぎよっとしていたが、何もなかったように店

員さんは軽くおじぎをして去って行った。その後ろ姿を見送った後、香耶は自分のグラスを持ち、そして美佐子にも持つように促した。

「ほらほら、おめでたいことなんだからさ、せっかくだし…こんなとこだけ乾杯しようよ？」

「…うん」

グズつと鼻をいわせた後、美佐子もビールジョッキを持ってお互いかんぱーいとグラスをぶつける。香耶は勢いつけてそれを飲み、そしてテーブルの上に置いた。

「えーでもさ、いつ頃知り合ったの？」

「んーっとね…1年くらい前、かな？」

「いつ！？そんなに前…」

「うん…でも、これもまた微妙なんだけどねー」

「はあ、まあいいや。なんか落ち込むし…んで？何してる人？芸能人とか？だから言えなかつたとか？」

「あはは！違うよ、キシだよ」

「…ああ、ああ、医師か。そりやまた高給取りを見つけたわねえ」

「違う違うキシだつてば！馬に乗って、剣持つて…まあ一応近衛隊士だから高給取りつちゃー高給取りだけど」

「…え？キシつて…はあああー！？騎士！？あの歴史の教科書とかに出てくる？」

「うん、そう。これがまたかつこいいんだー隊長クラスには負けるけどね」

「…」

香耶は、うつとりとした表情を見せる美佐子に顔をひきつらせた。美佐子は昔から妄想しがちだったが、同じぐらい妄想癖の激しい自分を基準としていたので、彼女がまさかここまでだとは思っていなかったのだ。やっぱり仕事で何かあって…と香耶は先日職場の上司とうまくいっていないと言っていた美佐子の話をもっと聞いておくべきだったと激しく後悔した。

そんな香耶の心配そうな顔を見て、美佐子はふふつと笑った。

「ごめんね、言い忘れてたんだけど…」
「なに？」

そう言いながら、香耶はグラスに手を取り、カシスオレンジで少し乾いた喉を潤した。

「彼、異世界の人なの」
「……………は？」

そうして、冒頭へと繋がるのである。

第0章 全ての始まり（後書き）

しばらくはこまめに連載予定です。

おかしいところ訂正！したりレイアウトかえたり、今日だけは色々いじってます（ごめんなさい）

今週末に、大親友である美佐子の結婚式がある。

ということをし、香耶は誰にも言えずにいた。というよりむしろ、美佐子の結婚式があるということが、余りにも非現実的で、香耶自身がまだ信用できていない。

いきなり結婚すると言いだしたかと思えば、なんと相手は異世界に住む王族直属の騎士ときたもんだ。一体どこの誰が、25歳にもなつてそんなことを信じるだろう。

先日、二人で飲みに行き、始終呆けた顔をしている香耶を無視して、美佐子はうっとり幸せそうな顔で彼について語り続けた。

美佐子が行った世界はトロイメルというらしい。いわば地球「トロイメル」のようなものだそうだ。そしてその例の彼が住むのはその中でも最強とされるゾラ王国。日本ほど科学の技術は進歩していないが、その分人々が力強く明るい国らしい。ここまで話を聞いて、香耶はもう美佐子の頭が末期なのだと悟った。

現在ゾラ王国を治めるのは、マーティスという王様で、昔は戦神と言われていたらしい。3人の奥さんと沢山の子どもに恵まれ、現在は他国と戦争をすることも滅多になくなった。その為、いつか彼の子どもたちが大きくなった時、彼らを十分に守れるようにと騎士として訓練するのが今の若者の流行らしい。美佐子は、その騎士宿舎の現在婚約者の彼の部屋に急に表れたそうだ。

この辺で香耶はカシスオレンジを一気飲みしたせいで頭が痛くなってきた。

もちろん頭痛の種はそれだけではないだろうが…

美佐子の家に向かおうとする香耶を、玄関先で見送りながら香耶の母が言った。

母には、美佐子がたちの悪い病気にかかっているから看病してくる、と伝えてある。仲良し歴も長い為、美佐子のことをとてもよく知っている母は、必要以上に心配していた。

何故なら、美佐子には血縁者が誰も居ないからである。

小さいころに両親を亡くした美佐子は、母方の祖父母に引き取られ育てられた。そしてその祖父母も、香耶と美佐子が大学生の時に亡くなった。祖母がなくなり、それを追いかけるように祖父も。あの時の美佐子の顔は、今でも香耶の脳裏に焼き付いている。悲しいほどに。

それから一人暮らしを始めた美佐子を、香耶の母は心配して何度も家に呼んだ。今では、美佐子は香耶の姉妹のように家族に認識されている。香耶の唯一の姉弟である弟の翔太なんて、「美佐子姉ちゃんが本当の姉ちゃんだったらなー」と言うほどである。もちろん香耶はそんな弟の尻を思いつき蹴飛ばしたりしたが。

「お薬とか大丈夫なの？なんだったら家に来てもらえばよかったのに……」

「うんでも起き上がるのもキツイみたいだからさ。まあどうしようもなくなったら連絡するかもだけど」

よっこいしょと荷物を持ちながら香耶は母に言った。

まさか今週末に美佐子が結婚式を挙げる為今から美佐子の家に行くなんて、美佐子の部屋が異世界の騎士ロナルドの部屋に繋がっているなんていうことを全く信じてない香耶は、母の心配そうな顔に良

心が少しばかり痛んだ。

ただ本当のことを言っても、「あんた何言ってるの?」と馬鹿にされるのがおちである。

まあ、美佐子はある意味本当に病気だし…と心の中で言い訳した。

「けどまあ、香耶ちゃんのお休みがあつてよかったわねー」

「それは本当に。まさかの1週間も会社都合で休みだなんてね」

「きつと美佐子ちゃんを大事にしなさいってことよ」

母はそういうが、この休みは、香耶が有給を消化しただけである。

会社が有給を使ってくれと頼むものだから、仕方なくここで1週間ほど使ったのだ。美佐子がうまく現実を見れたら一人で、見れなかつたら強制的に癒しも兼ねて二人でそのまま日本ぶらり旅にでも行くこうと思いい準備をした為、香耶の荷物はいっばいなのである。

ちなみに美佐子からは、向こうの世界には向こうの世界の服装があり、自分の服を貸すから何も持つてこなくていいと言われていた。そして、気に入るものがない場合は、ロナルドがお金には困っていないから、なんなら買ってもらえばいいとまで。

「ああ、でも美佐子ちゃん…大丈夫かしら?」

「……私もそう思うよ」

母の不安そうな声に、香耶も別の意味で同意したのだった。

第1章 異世界への出立 - 1 - (後書き)

少しばかり説明くさくなってしまった…

「待ってたよーってか、渡してる合鍵は？」

「ああ、机の引出しに入れっぱなしにしちゃってさ、忘れた」

「全く…合鍵の意味ないじゃん、ま、入って入って」

香耶が美佐子の家を訪れ、ピンポンとチャイムを鳴らすと、美佐子はいつもよりちよっとしっぴかりめに化粧をした顔で迎えてくれた。自宅で化粧する必要なんてないのにと思いながら、いいや違うかと香耶はプルプルと玄関先で頭を振る。これから異世界へと旅立ち、そしてそこで愛しの恋人と会い、結婚するのだと美佐子は信じているのだから。

どうしたら美佐子が現実に戻ってこれるのかなとぼんやり考えながら、取りあえずと靴を脱ぎ、家に一歩踏み入れる。

途端広がったその光景に香耶は愕然とした。

今まで部屋に置いてあったはずの家具や家電の大半がなくなっている。

しかも、美佐子は家具に大変拘りを持っていて、アンティーク物で中々お目にかかれないようなものが沢山あったことを香耶はよく知っている。何度も自慢され、そしてその額を聞いてぶっ倒れそうになっただけだ。

「ど、どうしたの美佐子…この部屋…」

「え？…ああ、だってもうこの部屋に住むことはなくなるわけだし」

そう言いながら、美佐子は辛うじて置いてあったドリンク専用の小さな冷蔵庫から缶ジュースを二本取り出し、一本を香耶に渡してきた。呆然としたまま香耶はそれを受け取り、持っていた荷物を部屋の隅に置いて、フローリングにぽんと無造作に置かれたクッションの上に座る。大好きだったふかふかのベッドも、座り心地の良いソファもどこにも見当たらない。

「…そっぴや香耶、それ何？」

「え、何が？」

「荷物よ、に・も・つ。要らないって言ったじゃん…あんたまさかまだ私の話を信じてな」

「ち、違う違う違う！だって、1週間も泊まるのに何も持ってこないって可笑しいかなと思って」

「…誰から見てる？」

「私の家族からよ。ええと…やっぱり美佐子から言った方が喜ぶと思っ…うん…内緒にするための作戦で大荷物になったの！」

「何を内緒に？」

「結婚するってことを！直接、言っ…て欲しい…せめてうちの母さんにだけは…」

「そっか…そっぴやだね…」

香耶の咄嗟の嘘に、美佐子はしょぼりしたように俯いた。

ちよつと悪いかなと思っ…たが、でも本当に結婚する時も、美佐子が直接香耶の家族に言っ…てくれたらいいなと思っ…つ。母は本当の娘のよっ…うに美佐子と思っ…ているし、美佐子にも心から、香耶の家族を自分の家族と思っ…てほしいからだ。

しかしまあ、いきなりな割りに上手く嘘がつけたものだと言え、香耶は自分に関心した。まだ信じていないなんて言ったら、美佐子に絶交宣言されかねない。

「まあ、お母さんたちは置いてきてさ。どうやって行くの？異世界には……」

「あ、そうそう！それが問題なんだよね、この問題がなかったら香耶パパもママも翔太くんも呼べただけだ」

そう言いながら顔をあげ、美佐子は香耶の横にある鏡を指差した。アンティーク好きな美佐子が、半月程前一緒に買い物に出かけた際にシヨップで見つけて大興奮した代物だ。その鏡に1度目を向けた後、香耶は再び美佐子へと視線を戻した。

「……あれが、何？」

「だから、あれで行くの」

「……は？」

「だから、あれでトロイメルに行くのよ。ロナルドの部屋の鏡に繋がってるから」

「……」

よくあるファンタジーだ。鏡の中の国だなんて。一体美佐子は何の本を読んでここまでおかしくなってしまったのだろうか、香耶は美佐子にはれないようにそつと息を漏らした。

美佐子の言う鏡の前に行き、その裏を覗いてみる。もちろん何もない。ただ、何語かわからないような文字が書いてあるのが見えた。

漢字でなければ英語やハングルでもない。一体どこの国の言葉だろうと首をかしげながら鏡の表側に回る。鏡に映っているのはもちろん、見慣れた自分の姿と、隅の方でにこにここと上機嫌に笑う美佐子だけだ。

「…とくに異世界に繋がっているようには見えないけど…」

そう言いながら、香耶は鏡を軽く叩いた。しかし手が鏡の向こうにすり抜ける、なんてことはなく、ただコツコツと音を立てるだけだった。

「ああ、向こうに行くには条件があるのよ」

「条件？」

「そ。まあ、こっちに戻ってきて話しましょう」

美佐子が先程まで香耶が座っていたクッションを、ぽんぽんと叩いた。

第1章 異世界への出立 - 2 - (後書き)

まだ旅立てず…

「向こうの世界と繋がる為には、色々条件があるのよ」

香耶が座りなおすのを見届け、美佐子は缶ジュースを一口ゴクリと飲んで口を開いた。

「条件？」

「そ。まずは時間のズレから教えとく」

「時間のズレ？」

「うん。私がほら、ロナルドに出会ったのは1年前ぐらいだったでしょ？」

「あ、うん……」

確かに、以前居酒屋に行った時、美佐子がそんな話をしていた記憶がある。

そんなに前から自分の親友だと思っていた人に好きな人がいたこと、結婚する程愛する人がいたことを全く知らなかったことに大打撃を受けたものだ。まあもちろん、その後の美佐子の発言でそのシヨックは綺麗さっぱり消えてしまっていたが。

「それなんだけどさー…実は向こうの時間で、ってことなのよ」

「？向こうの時間？」

「そう。だからもしそれをこっちの時間に換算したら…知り合って2、3日で結婚ってことになるの」

香耶は飲んでいたジュースを思わずぶつと嘔き出しそうになった。それに堪えられた自分をとても褒めてあげたい。もし嘔き出していたら、恋人に会う為に一生懸命化粧した美佐子の顔に直撃するところであった。話が終わるまでコレを飲むのは危険だと、香耶は缶を少々自分から離れたところに置いた。

「ちょっとよくわからないんだけど…時空の歪みってやつかな？」

「なんか小説とか映画でよく見かけるやつね」

「そうそれ！だからほら、この前の3連休、あったでしょう？あの時向こうの世界に行ってたってわけ」

「あー！！だから私が携帯メールしても電話しても返事も何もなかったの？」

「こっちに置いて行ってたから…というか、むしろ私も向こうに行くとは思ってなかったからさあ」

「すっごい心配したんだけど」

「うん、わかってる。だから帰ってきてすぐに連絡したでしょう？話があるって」

「え…あ、うん…」

「だからさ、本当は好きな人ができて付き合うことになって…すぐに連絡したも同然なのよ」

ただ、言う機会と時間がトロイメルに行ってた為になかっただけで、と美佐子は香耶のモヤモヤした気持ちを知っていたのか、話せなかった原因について語ってくれた。

「でもさ…ってことはトロイメルに戻ったらかなりの時が経ってるんじゃないの？」

とりあえずどこか話の綻びを探すように、香耶は質問した。この前の3連休から既に1週間経っている。3日で1年というなら、1週間経った今、既に向こうでは2年以上の時を経過しているということになるはずだ。しかし、「そうそれなんだけど」と待っていてしまったとばかりに、美佐子は近くのダンボールに手を伸ばし、その上にあった綺麗な箱を二人の間に置いた。

見覚えがある箱。香耶がアンティーク好きな美佐子の為に社会人になって初めて買った、ちよっと高価な誕生日プレゼントのアクセサリーケースだ。

美佐子はその箱を大事そうに一撫でした後、蓋を開けた。中には、高級そうな宝石のついたペンダントが一つ、入っている。その宝石が本物かどうかは、庶民な香耶には残念ながらわからなかった。

「これが、前話したペンダント…香耶の為に無理言っ借りにきた」「へえ…これで、わかるの？言葉が…」
「うん。そして、これ…」

そう言いながら、美佐子は自分の首元に手をやり、ネックレスを引っ張り出す。
指輪だった。

きつと、ロナルドとやらがくれたと言っのだろうとわかっていたから香耶はあえてそれには触れなかった。

「もちろん私も馬鹿じゃないからね！時間の経過具合とか向こうではわからなかったから、別れた3日後に戻ってこれるようになってロナルドとこの指輪に誓ったの」

「……………ダメだったらどうするの？」

「大丈夫！ちゃんとゾラ王国の図書館で必死に調べたから」

「ふーん……」

「まあ、色々説明したら長くなっちゃうし……ねえ、とりあえず着いてから話さない？向こうの話ばかりしてたら早くロナルドに会いたくなっちゃった」

「別にかまわないけど」

準備するから待ってと立ちあがった美佐子の後ろ姿を、香耶はぼんやりと眺める。見た限り全くもって普通なのに。これでトロイメルとやらに行けなかったら美佐子はどうするんだろう。傷心の余り病んだりしないことを期待するばかりだ。

そんなことを考えていると、美佐子が香耶の前に戻ってきた。手には頑丈そうなロープがある。何に使うんだろうと思っていたら、美佐子はそのロープを香耶の腰にまわし、いきなりギュッと締めあげた。

「ぐえっ！！何!?!」

「あ、ごめん…ほら、世界を渡る時にはぐれないように…」

そう言いながら、美佐子は香耶に結びつけた方と反対側のロープを自分の腰にしっかりとまわす。そして、先程の箱からペンダントを取り出し、香耶の首にかけた。

「さ、香耶立って立って」
「はいはい」

こうなったら美佐子の気が済むまで付き合っただげようと香耶は言われたとおりに立ちあがる。そして、二人で先程の鏡の前にやってきた。

本当に世界を渡るわけでもないのに。
緊張で香耶の胸がドクリと大きく鳴った。

「今から呪文を唱えるから。香耶はしっかり私に捕まってる」
「…うん」

美佐子は鏡の前で大きく息を吐く。美佐子の身体にぴったりとくっついてたまま、香耶も鏡を見た。

「カトープ・オ・アーカ」

何それ、と突っ込もうとしたが、できなかつた。

眩しいくらいの光が鏡から溢れだし、香耶は目を開けているのも困難で、反射的に目を瞑った。

美佐子の身体にしがみつく腕に無意識のうちにぎゅっと力が籠った。

第1章 異世界への出立 - 3 - (後書き)

やっと旅立ちました。

第1章 ある朝の

「また断ったそうですね」

シャットという音と同時に、真つ暗だった部屋に明りが入る。締め切ったカーテンが左右に開かれ、窓から入るその光の眩しさに、そう言い放った男は少しだけ目を細めた。

「……朝の挨拶がいきなりそれか…ヴァイス…」

「おはようございますの方がよろしかったですか？しかし、もう昼に近いですよ」

「…誰も起こしにこなかった…」

「あなたがまさか自分の寝室で寝ているとは思いませんでしたからね」

「そうだと思つてこつちにきたんだ」

「…全く。普段はどこで眠つていらつしやることやら…」

ヴァイスと呼ばれた男が、はあと大きくため息をつく。そんな姿に大きな天蓋付きのベッドに寝ころんでいた男は軽く口の端を上げた。自分の身分を知りつつ物怖じしないで話し掛けてくる人間は相当少ない。まして、ヴァイスのように嫌みを言ってくる者なんて尚更のこと。

「で？今度はまた隣国の姫とのお見合いを断ったそうで？」

「馬鹿げているよな。私に申し込むなんて」

「まあ…あなたが結婚する気がない、ということは大抵の者が知っているでしょうが」

「だろう？」

「それでも諦められないのが人間の性というものでしょう…？」

「現に」と言いながら、ヴァイスはベッドの中の男に、ポンとファイルを投げつけた。男はそのファイルにチラリと目をやって、苦虫を噛み潰したような顔をした。手を伸ばして開いてみようというそぶりは一切見られない。

「……見ないんですか？」

「見なくてもわかる。義母上からのものだよね」

うんざりした様子で男は起き上がり、そのファイルを無視したまま、大きく伸びをした。

「では、このファイルはいつものように焼却しても？」

「ああ」

「……結婚、してみればいいじゃないですか。案外良いかもしれませんよ」

「独身のお前がそれを言うのか、ヴァイス」

「私は一生独身で結構ですが…あなたは今はその気がなくてもいつかは結婚しなければなりませんので」

「別にいいだろう？私も一生1人でも」

「ですが、世継ぎの問題がありますので」

そうヴァイスが言った瞬間、男は自分の近くにあったファイルをヴァイスの方へと投げつけた。しかしそれはヴァイスに直撃するのではなく、ヴァイスの横を通り抜けて壁にバシんと音を立ててぶつかり、そのまま下に落ちた。

そんな状況にも、ヴァイスは眉一つ動かさない。

男が例えキレても簡単に人間、墓、生き物を痛めつけるようなことはしないこと、そして何より、自分の先程の発言を男が何よりも嫌っていて、言ったら怒るであろうことを知っているからである。

男はそんなヴァイスを見つめ、はあと小さく息を吐いた。

「……私に世継ぎはいらない」

「そうは言っても周りがそれを許してくれないのでは？」

「……兄上がいるではないか」

「その兄上も結婚しないから問題になるんですよ」

「……見合いの話を全部兄上に持っていったらいいではないか」

「あなたに申し込みがあつたものをですか？それは大変な嫌みになるでしょうね」

ヴァイスはそう言い放ち、にこりと男に向けて笑う。顔が笑っていても目は笑っていない。わかりきったことを言うのではないと、その目が訴えている。そんなヴァイスの様子を見て、男は一瞬悲しそうな表情を浮かべた。

兄ではなく自分にはかり婚約や見合いの話がくるのは、男のせいではない。もちろんヴァイスのせいでもない。

理由がわかつているからこそ、男は更に結婚する気がなくなるのだ。もう1度だけ大きいため息をついて、男はベッドから立ち上がった。

それを見てヴァイスはベッドの横にかけてあったガウンを男の背にかける。もう何度も繰り返された自然な光景だ。

「…侍女をお呼びしますか？」

「いやいい。今日は予定があつて…すぐ出かける」

「……本当に寝る為だけに帰ってきたんですね」

「ああ…また一時ここには帰ってこないだろうから…連絡がある場合はいつもの方法で頼むな」

「……今度は何日程で戻つて来られないのでしょうか？」

「……気が向けば帰ってくる…まあ、もしかしたら明日いるかも知れない」

そう言いながら男はクスクス笑う。ヴァイスは呆れた顔でそんな男を見つめた。

「全く…していることを知っている手前、止められないのが残念です」

「はは、お前には苦勞かけるな」

「わかっているなら…もう少し自分の身体を大事にしてください…」

「……王子」

今日会って初めて見せるヴァイスの本当の表情。その心配そうな顔に、王子と呼ばれた男はありがととだけ言つと湯浴みをする為に風呂場へと向かった。

第1章 ある朝の（後書き）

飲み会で更新できませんでした。

まばゆい光に包まれたと思ったら、巨大な掃除機に吸いこまれるようなすごい力で何かに身体ごと引っ張られた。そしてその苦しきから解放されたと同時に、ふわっと心臓が浮くような浮遊感があり、それが一瞬で終わったかと思うと、今度は背中からモフっとした柔らかいものの上に落ち、最後に何か柔らかいはずしりしたものが香耶の上に落ちてきた。その重量感に、眩しさでしつかりと瞑っていた目を反射的に開く。視界に入ってきたのは見覚えある洋服と見覚えのない真っ白な天井だった。

上に乗っかっているのは美佐子だろうが一体ここはどこだろうと、自分の背後に広がる柔らかいものにそっと触れる。自分の部屋のベットのシーツのような感触だった。

「うーん」という声が聞こえはつと美佐子を見ると、彼女も香耶の上に乗っているという状況に気付いたのか、香耶の両側に手をついて上半身を起こし、目をパチパチと瞬かせた。

「ミサー!!」

とりあえず現状を把握しようとして頭を回転させながら、香耶が美佐子に声をかけようとした途端、それを邪魔するかのようになり、今度は聞きなれない男の声が聞こえた。その声が聞こえた瞬間、美佐子ははっとしたように香耶から視線を外し、ゆっくりと声の聞こえてきた方へと顔を向けた。

「ロナルド!!」

美佐子は妄想の愛しの彼の名前を呼んだと同時に、顔を向けている方へ駆け寄ろうと、少しだけ起き上がりさせていた上半身をガバリと起き上がり、立ち上がるようにする。一体なんだと、その方向へ香取も顔を向けようとした時、何か細いものにお腹の辺りを何かにぎゅつと締めつけられた。

「ぐえっ！」

「あーごめん香取！ロープで繋いでたこと忘れてた。ロナルド、何か切るものない？」

「…ああ…ちよつと待って」

いきなりの締め付けに先程飲んでいたジュースを吐きだしそうになりながら、自分を落ちつける為にもう一度目を閉じて深く深呼吸する。

近くで、誰かがドタドタと走る音が聞こえる。

深く息をついた後、香取がそつと目を開くと、白い天井が見えるはずだった視界に、戦争ものの映画の中で何度か見かけたことがあるような軍服を着た外国人が、サバイバルナイフのようなものを持って立っているのが見えた。

「……っキヤー！！」

「え？」

外国人の男は、香取の大声に一瞬ビクリと後ずさる。男は数回目を

パチパチと瞬かせ、チラリと美佐子に目を向けた後ゆっくり頷き、ナイフを持っていない方の手を、香耶と美佐子の方へと伸ばしてきて、2人を繋いでたロープを手に取り、サバイバルナイフでそれを切った。

「……………あ、そっか」

パニックに陥ってる最中に、戦争映画でしか見たことないような服を着た男が武器を持って自分たちに近づいてきたものだから、香耶はその前の美佐子の発言をすっかり忘れていた。事が終了した後、自分の勘違いに顔を赤く染める。そんな香耶の勘違いに気付いたのが気付いていないのか、美佐子は香耶の上から降り、2人が倒れこんでいたものから降りて男の横に立ち、香耶を引つ張り上げ上半身を起こしてくれた。どうやら2人はベッドの上に乗っていたようだ。「ありがとう」と美佐子に言いながら、チラリと男を見ると、男はその視線に気付いて、香耶を見てにっこりと笑った。

「君が噂のカヤさんだね？」

「あ……………はい」

「僕はロナルドだ。ミサから聞いたかもしれないけど……………」

そう言いながら、ロナルドという男は照れたようにポリポリと頬を掻き、そして美佐子の方を見る。それに釣られたように香耶も美佐子を見れば、美佐子はロナルドにほほ笑んだ後、香耶へと目を向ける。

「彼が話していた私の婚約者、ロナルドよ」

「ああ………ええー!？」

「ふふ、かっこいいから驚いたでしょう? 映画俳優と言っても過言じゃないものね」

そう言いながら、美佐子は横に立つロナルドの腕に自分の腕をからませる。ロナルドはその触れ合いを待っていたとばかりに美佐子の頬へ、キスを落とした。

まさか本当に存在するなんてという驚きの声だったのだが、上手い具合に美佐子が勘違いしてくれたので、「うん、そうだね」と口元をひくつかせながら美佐子とロナルドを見る。「ああ、会いたかった」「3日がこんなに長いなんて思わなかったよ」とかなんとか言いながら、美佐子とロナルドは香耶の存在すっかり忘れ、キスを繰り返している。なんだか見てはいけないものを見ているような気がして、香耶は目の前の2人からそっと視線を外した。ベッドの横にあったのは大きな鏡。美佐子の部屋にあったものとそっくりな代物だ。

まさか本当に世界を渡ったんだろうかと、あり得ない現象にぼんやりとしていると、ゴホンとせき込む声が、ロナルドと美佐子の背後から聞こえた。

「久しぶりの再開で興奮するのは悪いが…私の存在を忘れないで貰いたい」

その声にはっとしたように、ロナルドと美佐子が背後を振り返り、そして2人は慌てたようにその声のした方へ、謝るかのごとく深々

と頭を下げた。

第1章 出会い - 1 - (後書き)

すみません、間があきまして。しかもあんまり完成度良くない…
21日、とりあえず訂正だけ！

第1章 出会い - 2 -

美佐子とロナルドの頭が下がったことで、香耶の視界がぱつと広がった。初めて見渡せた部屋の中、最初に視界に飛び込んできたのは、一人の男だった。

ロナルドも美佐子が言うように確かにかっこいいが、それとは比べ物にならない程美しい男だ。サラサラした金色の髪に、空の色を切り取ったかのようなブルーの瞳。まるで物語に登場する王子様のようだ。そんな男が、長い脚を器用に組んで、興味深そうな顔で香耶の方を見ていた。

「……誰？」

「ばっ！香耶！！頭下げなさい、頭！！」

香耶の台詞に慌てたように美佐子が香耶をベッドの上から引きずり降ろして無理矢理頭を下げさせる。そんな慌てる2人の横で、ロナルドはピクリとも動かない。美佐子は確か、ロナルドは上層部の人間であると言っていたはずだ。そんな彼がこんなにしっかりと頭を下げるのは余程の権力者なのだろう。昔は身分のお高い人の機嫌を少しでも損なうと罰せられたりしたんだよな…と嫌なことを思いだし、香耶の背中にツツと冷や汗が流れた。

「頭を上げてくれ、3人共。わかっていると思うが、私はそんなことを望む人間ではない」

「はい」

男の声に、ロナルドがそんな返事をしたものだから、香耶は下げた頭をあげ、男の方を見る。てっきりロナルドの方を見ているだろうと思っていたのに視線がしつかりとかちあってしまい、香耶は慌てて視線を反らした。どうやら男にそう言われて1番初めに頭をあげたのが香耶だったらしい。美佐子とロナルドの頭が今ようやく上がったところだった。

「しかしまさか、本当に鏡から人が出てくるとは思わなかったな」
「何を仰いますやら…私の婚約者が鏡に入っていく際同席して戴いたではないですか」

「まあ…あれはイマイチ夢だったような気がして…今回のではつきり夢じゃないとわかった」

「それは何よりです」

慣れているのであろう、ロナルドの男に対する態度はどれも丁寧だ。残念ながら、庶民出身の香耶にはこんな応対は到底できない。きちんとした言葉で話すのはせいぜい電話応対ぐらいのものだし、接する機会のある偉い人といえば会社の社長ぐらいのものだ。お門違いだとはわかっているが、フレンドリーすぎる会社の社長を恨まらずにはられない。

「さて…カヤ、だったかな？」

「は、はい!!」

いきなり名を呼ばれて、妙に背中がシャキっとする。気を付けの姿

勢のまま、男の顔を見る。やはり美形だ。日本では滅多に見れないその造形に思わずウットリしてしまう。いかんいかんと気を引き締める為に男の瞳を見つめる。本当に吸い込まれそうなほど綺麗な青色だ。

そんな香耶の様子を見て、何が可笑しいのか、男は香耶から目を反らし、クツクツと笑った。

「……………何か？」

「いや、なんでもない。異世界の人間とは本当に不思議だなと思っ
てな」

「…え？私を見てそう思っただんですか？」

「まあ…それだけというわけでもないが…今改めて思った理由を強
いて言うならそうなるな」

「……………それは…嫌味と取っていいものでしょうか？」

香耶の言葉に、男は一瞬驚いたように目を丸くした後、ハハつと声
を出して笑った。

そんな男の態度にどう対応するべきか困っていると、美佐子が横か
らツンツンと肘で香耶を小突いた。

「……………何か？」

「あんだ、目上の人に対する対応明らかに間違ってるわ……………」

「え？嘘！？ちゃんと丁寧に話したでしょう？」

「……………本当…これだから帰宅部出身の緩い会社勤務は嫌になるわ」

そう話しながら、美佐子は盛大にため息をついた。

どうやら香耶の目上の人に対する対応は間違っていたらしい。同じ日本出身の美佐子から見ても。しかし、自分では丁寧な対応をしているつもりなのでどうしようもない。これで処刑と言われたら、例え結婚式に出られなくても今すぐ日本に帰ろうと香耶は心の中で強く決心した。

「まあ、別に私は不快ではないから構わない」

男はそう言っただけで笑った後、ゆっくりと立ち上がった。その造作もかなり洗練されている。そして男はそのまま部屋の扉の方へと歩いて行った。

「さて、カヤ、行くぞ」

「……え？私？私も一緒にですか？」

「当たり前だ。この国でミサはロナルドが後見人になるから良いが、お前はいいだろうか？」

「え……んじゃあ私もロナルドさんに……」

「何を言ってる。私がなろうと言っているんだ」

香耶の台詞に眉間に皺を寄せそう言った後、男はああと思いつたように口を開いた。

「私が誰かわからなくて不安だったのか？」

「え？いや、そういうわけでもなく」

「そういえば自己紹介をしていなかったな……」

香耶の言葉を思いつきり無視してそう言うと、男は香耶の前まで歩いてきて、香耶の目の前に手を差し出した。

「私はこの国の近衛隊の隊長のグランツだ。お前のこちらでの生活は私が保証しよう」

だからついて来いと言わんばかりに、グランツと名乗ったその男は、差し出した手を更に香耶の方へと伸ばしてくる。

近衛隊の隊長と言えば王宮での生活をしているというかなりリッチな、そしてかなり身分のお高い人だったはず、と香耶は居酒屋での会話を思い出した。

この申し出を下手に断れば、彼の部下であるロナルドに迷惑をかけることになるかもしれない。しかし、何より香耶にはこれを断る理由がない。ふと現実を見ると、こちらの世界では香耶は一文無しのことにいる人間以外からすれば正体不明な人間なのだ。

深く考えることもなく、香耶は「宜しくお願ひします」とその手を握り返した。

第1章 出会い - 2 - (後書き)

ようやくここまで

21日訂正のみ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0955/>

Traumel

2010年10月9日00時07分発行